

手嶋教授の人柄と学問

後 藤 靖

今夕、皆さんとともに、手嶋先生をしのぶ会をもたなければならなくなったということは、私にとってはたえがたい思いでございます。

ことしにはいりまして、私たち立命館人は、三人の貴重な方々を失いました。三月には高橋良三先生を、そして八月には手嶋先生を、さらにつきさきごろ武藤総長を失いました。この三人の先生がたは、それぞれ要職におつきになっておられたかたがたです。

高橋先生は、経済学部長を長い間お勤めになり、二部が改組された時の最初の二部協議会委員長でもあり、その後、教学担当理事という激職におつきになりました。

手嶋先生は、一九六四年立命館にお見えになり、まだ日が浅かったにもかかわらず、翌々年には大学協議員にえらばれ、そして今年四月には経済学部長という要職をひきうけられました。武藤総長のことについては今更ふれるまでもなく皆さんよく御承知であります。

この三人の先生がたの歩みをふりかえってみますと、それぞれ持ち味は違っていました。立命館が掲げておられます平和と民主主義の教学理念を、先頭に立って、身をもって実践してこられた方々であることを痛感します。立命館が掲げておる平和と民主主義の教学理念というのは、一口にいえば、批判的でしかも創造的な人間をつくりあげていくということです。批判的で創造的な人間を形成するということは、国民大衆のための新しい社会をつくりあげていく戦いに参加していくことにほかなりません。

さらに、三人の先生は、立命館の中だけでなく立命館の外でも新しい社会を形成するための努力をたゆみなくつづけてこられた方々でした。その意味でこの人達をわたしたちが失ったということは、わたしたちだけでなく、日本の人民にとっても、大きな損失であるといわざるをえません。

さて、手嶋先生の人柄について、これから簡単にお話を申し上げ、みなさんとともに在りし日の先生を偲びたいと思います。

手嶋さんと私のつき合いは、手嶋さんが立命館に就任された一九六四年からでありますから、日は非常に浅い。時間的には短かいけれども、その密度はきわめて濃かったと思っています。

手嶋さんと芦田文夫さんと私の三人が中心になりまして、いまから二年半ほど前の一九六八年四月に『経済学の基礎』という本を出しました。それは、みなさんがたもお読みくださったかと思います。この本を作るのにほとんど一年半もついやして、しばしば三人で討論会をもちました。こうしたなかで手嶋さんとのつき合いは濃くなっていたわけですね。

そういうつき合いを通して、私を感じましたのは、手嶋さんという人は実に緻密なプランナーであり学問

的に人一倍貪欲な人であったということです。

私たちが共同執筆をしますとき、それぞれ分担をきめまして、手嶋さんは主として国家独占資本主義のところを書く、芦田さんが社会主義の項を、私は歴史のところを受持ったわけです。その際に手嶋さんは歴史家でもなく、私の領域にどンドン踏み込んでくる。そして、納得できるまで私に議論をふっかけてくるのです。たとえば、議論をつくしていったん別れましたも、家に帰ってからじっと考えておったんでしょ、夜中の二時でも、三時でも、私のところへ電話をかけてきて、「きみはあ言ったけれども、ここのところはどうしてもわからんのだ」という。そんなこともしばしばありました。それぐらい学問的に貪欲であり、あいまいさを許さなかったということが、私にとってはいちばん印象に残っております。

学問の世界では、貪欲であるということと緻密であるということとは一体のものです。自分が納得するまで、理論的に納得させられるまで、私にしゃべり続けさせていく。これが手嶋さんの学問する姿勢であったと考えております。そういう意味では、ねばり強い人でもあったといっているでしょう。このねばり強さは、さきほど足立先生や、自治会の諸君が申されましたように、例の学園紛争のなかでもあらわれています。

学園紛争が起こる前に、実は手嶋さんは胃を半分以上も切っておったのです。そして、薬で痛みをおさえながら、学園の民主化闘争を、積極的に、先頭に立って推し進めていった。その学園紛争が、手嶋さんの命を縮めた大きな原因であったと思うとき、深い悼みを覚えます。

手嶋さんは、また非常に趣味の広い人でもありました。旅行が好きで、いろんなところへ出かけられたようです。

ちょっといいと思つたら、もう山形へとんで行つておる。九州へ行つておる。あるいは信州の山を歩いておる。そして、行つた先々で、手嶋さんは、かならずなにかをつかんでくるのです。山形へ行きますと、山形の農民の生活のさまをきちんと正確につかんでくる。それと九州の農村とのありかたの違いを、正確な目でとらえてきておる。

信州へ行けば、藤村の記念館へ行つて、藤村の足跡をたどる。ことに『夜明け前』を愛読しておられて、『夜明け前』に書かれている道筋を、ずっと馬籠からたどりながら、丹念にその道すがらの風景を頭の中にたたきこんでくる。そういうように、その土地土地のあらゆる特徴を丹念に調べて、筆記してくる。こういう人でもありました。

さらに芸術にたいする愛好も強く、息子さんが画家であるという関係もあつて、絵に対しては非常に関心をもち、また山田盛太郎先生——この先生は手嶋さんがもっとも尊敬されていた方です——がクラシック音楽や絵画に造詣の深いことに触発されて、山田先生に負けるものかということで、またクラシックに凝るといふような、多趣味な人でもありました。

しかも、単にあつちこつちかじるのじゃなくて、自分で納得できるまで、とことんまで突き詰めていく。そういうしつこさが手嶋さんという人をつくりあげてきたと考えております。

もう一つ、手嶋さんのことで忘れてならないことは、単なる書齋での研究者ではなかつたということです。手嶋さんは、自分の研究というものを、かならず実践の場に移している。

御承知のように、京都府の教育委員を京都へ来たばかりのときにすでに引き受け、病をおしながら京都府教

育長問題で文部省と真正面から対決されたことはまだ記憶に新しいことです。蜷川府政のもとできづき上げられてきた京都の民主的教育制度を守り発展させるために、身をけずりながら奮闘されていた姿が鮮かによみがえってきます。病身を気づかかって、私達同僚の何人かが、しばしば、教育委員を辞めて静養しなさいよ、とすすめたのですが、手嶋さんは、京都の子供たちの教育を見放すわけにはいかないといって頑として聞き入れませんでした。いったん引き受けた以上は、最後までその職責を果すというその信念に、私は今改めてうたれています。

このように、手嶋さんは、単に書齋に閉じこもったのではなくして、自分の学問研究、学問の姿勢というものを、実践活動のなかにそのまま移していく人でした。そして、そういう実践活動のなから、自分の新しい研究の方法と体系をふたび吸収していく人であった。その意味で手嶋さんは、まさに理論と実践を統一しておった数少ない人だといえます。

ところで、手嶋さんの最近の学問的な業績については、後で、京都大学の池上先生から詳しくお話がございしますので、私は手嶋さんの生涯の研究の発展の段階を簡単に追ってみたいと思います。

手嶋さんは、京都大学を卒業されると同時に、満鉄の総務部の資料課にはいつておられます。学生の時分、つまり一九三五年といえますと、すでに日本のファシズム体制が完全にできあがっていたのですが、このファシズム権力によって、手嶋さんは直接に弾圧をうけています。それでも彼は節をまげないで、満鉄にはいつて、自分の学問をその場所できかけております。節をまげられなかったことは、一九四四年の横浜事件に連坐して逮捕されたことでもわかると思います。

満鉄時代にいくつかの論文があるはずですが私たちとしては、今後、それらの論文を集めていかなければなら

ないと考えております。そのなかで私達が知りえたのは、いまのところ一九四三年三月の「中支の民船業」という業績だけです。

敗戦とともに帰国されて、配給公団の大阪配管局というところにお勤めになり、五年に大阪府の商工経済研究所の嘱託になりました。ここから、手嶋さんの今日まで続いたいわば本格的な研究が始まってまいります。

手嶋さんの仕事を通観してみますと、私は三つぐらいの段階に区切ることができると考えます。一つは一九五二年の三月に出された「日本の繊維機械工業」から一九五七年までのものです。

この時期の手嶋さんの仕事を、私はあらかた読んでおりますけれども、ここではもっぱら実態調査に精力が注がれております。しかし、単なる実態調査ではなくて、手嶋さんの場合には、所有の問題、つまり資本主義的な所有がどのように発展し、展開してきているかという論点をはっきりと貫いておる点が特徴的であります。

さらにもう一つ注目しておかなければならないことは、たとえば一九五二年三月の「日本の繊維機械工業」というものを大阪府の商工経済研究所の時代に書かれておる。一九五三年六月の「大阪における鉄工業、綿織物業の実態」というのも、大阪時代の労作です。一九五三年六月に広島へ移られてから、五三年九月に「仁方ヤスリ工業」、十月に「広島県における鋼造船と下請工業」という論文がでてまいります。そして、五六年三月に「日本鋼造船業における下請制の研究」、五六年十二月の「近代産業と地域社会」それと五七年三月の「下請中小工業の生産様式と経済法則」が書かれます。こういうように、五三年九月から五七年三月までの仕事は、すべて広島という土地を中心にやられておるといふことであります。

ここから、私は、手嶋さんの学問上の研究のしかた、あるいは研究の態度というものを強く学ぶわけです。それはどういふことかといえますと、自分が住んでいる地域の経済構造、自分が住んでいる地域社会というものが、いったいどのような支配構造になっているかということに大きな関心を寄せているということです。そのことはなを意味するかというと、手嶋さんの学問が、自分の住んでいる地域社会の中で、どのようにして民主主義を實現していくかという基本課題を、研究の中心にすえているということです。ですから、手嶋さんの場合、単に調査、研究ということではなくて、調査、研究の中から自分がめざすべき未来社会をどういふように模索していくか、なにをなすべきかということが、その研究態度をつらぬいている一本のつよい線であったといえると思います。

手嶋さんの研究の第二の段階は、一九五七年から六〇年までの時期です。この時にそれまで下請工業、あるいは地方産業を取り上げてこられたわけがありますが、それをいっぺん理論的に、体系的にやりかえてみようと思われたわけです。『資本論』や古典に立ちかえって、マニファクチュアの生産形態やマニファクチュアにおける賃金形態というものを研究されます。この五七年から六〇年にかけてのマニファクチュア研究というものは、所有と賃労働の問題、つまり資本と賃労働というものを、正確に、理論的に、体系的に把握するという仕事になっております。そうした研究の成果として一九五九年六月の「歴史学研究」に載りました「日本のマニファクチュア研究における基本的諸問題」という論文は、私はマニファクチュア研究における画期的な労作であると思っております。

その場合に、私たち研究者ばかりでなくて、学生諸君も、その態度に学ばなければならぬ点が多々あります。

それはなにかといえますと、早稲田大学に市川孝正氏という人がおられます。私とほとんど同年輩の私の親しい友人の一人です。この「日本のマニユファクチュア研究における基本的諸問題」は一九五九年でありますから、いまからもう十何年も前です。私がいま四十四歳でありますから、この市川孝正さんも当時はまだ三十二、三歳であった。手嶋さんは、そのときにはもう五十に手が届きそうになっている。五十になろうとしている人が、学問の世界では、まだくちばしの黄色い三十二、三歳の若輩が書いた論文をすみからすみまで読んで、それを丹念に批判していく。これは、並みたいいの人間ではやれません。

私も、研究をはじめたばかりのいろんな人々から批判を受けますが、私はほとんど反論のための論文は書いていません。ここに私と手嶋さんとの人間的な開きがあるんじゃないかと、痛感させられるわけなんです。いかに若かるうが、どんなに駆け出しの人間であろうが、仕事の分野では自分と対等の人間として、一対一で勝負をしていくということです。これは、たいへんな努力のいる、精神力のいることであり、学問にたいする情熱と純粹さなくしてできるものではありません。

この「日本のマニユファクチュア研究」では、市川さんのものばかりではなくして、そのほかいろんな人たちが批判のやり玉にあがっております。しかも、その批判は、きわめて的確である。そういう意味で、日本のマニユファクチュア研究というものは、この五九年六月の論文で大きな前進を遂げたといつていいでしょう。

とりわけそこで問題にされましたのは、賃労働の問題です。それまでのマニユファクチュア研究というのは、マニユファクチュアの資本の研究であったわけです。つまり、マニユファクチュア資本がどのような過程で形成されてくるかということですが、その場合、マニユファクチュアの労働者がどのようにつくり出され、そ

れがどういう状態におかれるのか、つまり人民の側からみていく研究というのは、それまでほとんどなかったわけです。手嶋さんは、それを人民の側からとらえようとした。ここが注目しなければならぬ点です。それが体系化されるのが、五九年十一月の「等級制賃金の理論」と六〇年二月の「マニユファクチュア賃労働の範疇」という論文です。

しかも、そういう仕事をしながら五九年一月には、マルクスの著書の中でも、「ドイツ・イデオロギー」とともにきわめてわかりにくい「資本制生産に先行する諸形態」、私たちは通常フォルメンと呼んでおりますけれども、それを丹念に追いつけて、そして翻訳を完成しておられます。このフォルメンの訳書は、いま幾種類か出ておりますけれども、やはり手嶋さんの訳がいちばん正確であると私は評価をいたします。

フォルメンは、マルクスが所有の問題と賃労働形成の問題を追究したノートです。だから手嶋さんが、一貫して自分のテーマとして設定しておった所有の問題と賃労働の問題を、この原典の翻訳の中からあらためてつかみ直したと考えていいだろうと思うのです。

手嶋さんの研究の第三の段階は、六一年から始まってまいります。六一年から亡くなるまで、手嶋さんは、日本の国家独占資本主義の研究に精魂をかたむけられました。

なぜこういうように研究が転換したんだろうか。それには、安保問題とのかかわりを考えざるをえません。手嶋さんにとっては、安保、つまり日本の帝国主義の復活の傾向がきわめて顕著になった時点では、もはや、自分に深くかわる問題はマニユファクチュアの問題ではなくて、国家独占資本主義の問題こそが本来的に対決すべき学問の対象であり、実践的な課題でもあったと認識されはじめてきたことです。その意味で、六一年六月に出

てくる「金融的、軍事的な従属国とその経済的土台」という論文は、手嶋さんの研究史上における画期をなしているといえます。

一つの研究にとりつかれた人間が、自分のテーマを切り換えるということはたいへんなことです。私自身、もう二十年も一つのテーマを追いつけておりますけれども、なかなかそれが切り捨てられない。愛着心もありますし、それ以上に、テーマを切り換える場合には、理論的に根本的なやり替えを必要といたします。研究の転換という場合には、清水の舞台から飛び降りるぐらいの決断が必要です。

おそらく手嶋さんの中にも、転換すべきか、いままでの仕事を継続すべきかという悩みがうず巻いておたたらうと思うのですけれども、国独資の研究に切り換えていかれた。ここに私は、手嶋さんの理論と実践の統一という基本的な研究姿勢に打たれるのです。

手嶋さんの国独資研究が、研究史の上でどのように位置づけられるかという点については、国独資の専門家である池上先生にお話していただくことにします。

手嶋さんのこれらの論文は、一本にまとめられて、六七年の十二月に有斐閣から『日本国家独占資本主義論』として出版されました。私は門外漢でありながら、この本を丹念に読みまして、「手嶋さん、この分析はおかしいじゃないか」と言いました。それはなにかという点、このなかには、資本の生産関係の分析はあるけれども、この資本がいったい労働者をどのように編成していくのか。労働者を編成するということは、剰余価値の収奪の問題にはかからない。手嶋さんが追いかけてきておった賃労働の問題が抜け落ちているじゃないかと批判したことがあります。

「それはそうだ。私は、それをこれから三部作でやろうとしておるのだ。そんな、なにかも一気に注文するなよ」というようなことで笑い話になったわけです。その際にも、例によって、私のような門外漢の言うこともじっくり耳を傾けて、それこそ根掘り葉掘り問いただしてくるといふ一幕がございました。

私たちは、まえにもいいましたように、六七年の正月から始めまして、やっと六八年の四月に『経済学の基礎——所有の歴史』という共著を書いたわけですが、実はここでもう一つ「労働の歴史」というものを考えなければいけないのじゃないかという話をしておりました。しかし、それは、もう手嶋さんとの共同成果として実らせることができなくなりました。

私は時間を得て、手嶋さんの遺志でもある「労働の歴史」というものを、いつかは書いてみたいと考えております。

この六八年ぐらいから、もう手嶋さんの体は次第にむしばまれていってしまいました。にもかかわらず、著作目録でもわかるように、六八年の四月、五月、十月、そして七〇年の二月まで書き続けてきておられました。これは、並みたいていのことではできません。自分のからだが悪いということを知りながら、なんとかして自分の体系を早く完成させたいということをしょっちゅう語っておられました。

「京都府の教育行政についても、まだまだ問題が残っておるのだ。わたしにはするべき仕事はまだいっぱい残されておる」と、たえず語っておられました。業半ばにして倒れられた手嶋さんは、どんなにか苦しかっただろうと思います。

手嶋さんが目指された研究と教育というもののありかた、理論と実践の統一のしかたというものを、手嶋さん

から学び、それを受け継いで、そしてほんとうに私たちの新しい社会を建設することが、はじめて手嶋さんの霊を慰め、手嶋さんにこたえていく道であらうと思います。

ほんとうに手嶋さんは疲れたと思います。しかし、一人の人間の生涯としてはまことに立派でした。私たちが手嶋さんの生き方を引き継いで、手嶋さんをゆっくり眠らしてあげなければならないと思います。